イタリアの教育制度および教員養成
―サクロ・クオーレ・カトリック大学の取り組み―

Education Systems in Italy and Teacher Training:
Curricula on Università Cattolica del Sacro Cuore

間渕　泰尚

要旨

本論文ではイタリアの教育制度を概観するとともに、サクロ・クオーレ・カトリック大学における教員養成のカリキュラムについてまとめ、教員養成制度の国際比較を行うことを目的とする。教育制度では大陸ヨーロッパに共通の特質を持ち、柔軟性があること。教員の年齢・性別構成に特徴がみられる。教職課程カリキュラムの比較からは、イタリアでは教員免許を取得して卒業するために5年間が必要であること、教育実習に合計600時間（うち学校園での実習360時間、実習指導240時間）があてられており、実践力養成に比重が置かれていることが明らかとなった。

キーワード：イタリアの教育制度　イタリアの教員養成　国際比較、初等教育、中等教育

1．問題関心

本学では長年にわたってイタリアにおける海外研修を実施してきた。特に近年は現地の学校を訪問し、日本とは異なった教育制度や教育方法、その背景にある教育思想に触れる大変貴重な経験を得る機会となっている。そんな中で、イタリアの大規模な私立大学であるサクロ・クオーレ・カトリック大学（以下UCSC）の初等教育学部と交流する機会を得て、教員および学生が両国の教育制度や教育問題についてディスカッションを重ねてきた。そんな中で、交流によって得られた知識の定着を図り、今後の教育研究交流のベースとなるべく、背景的な知識についてまとめておくことが重要だと考えた。

まずはイタリアの教育制度について概観したあと、日本とイタリアの教育制度の違いに関していくつかのデータを紹介する。そのうえで、UCSCにおける教員養成課程のカリキュラムについて、大学HPや学生が作成したプレゼンテーションを基にまとめる。

2．イタリアの教育制度

2-1　全体的な教育制度

イタリアの学校制度は小学校5年、中学校3年、高校5年、大学3年のいわゆる5-3-5-3制をとっている。（日本は6-3-3-4制である。）そのうち、義務教育は小学校5年間、中学校3年間および高校の当初2年間の合計10年間、年齢にすると原則6～16歳である。また新学期は9月から始まり、1年間は2学期に分かれる。1学期はおおむね9月初中旬から1月下旬まで、2学期は2月上旬から6月中下旬までとなっている。また学校の設置者としては公立または国

神戸親和女子大学発達教育学部児童教育学科　准教授

立学校が大半で、私立学校の割合は少なくなっている。

2-2　就学前教育

イタリアの就学前教育機関は、年齢によって２つのタイプに分けられる。まず０歳から２歳児が通うのが保育園（asilo nido）である。３歳児から６歳児が通うのが幼稚園（scuola dell 'infanzia）とよばれる。幼稚園は1991年までは scuola materna と呼ばれていた。いずれも義務教育とはされていないが、国公立の機関は学費無料となっている。ただし、給食やスクールバスは有料である。先生の配置基準は保育園では園児６人に１人、幼稚園では園児25人に１人となっているが、２人をあてて交代するしくみを取っている園が多い。

幼稚園に関しては2012年に制定された国の指針（教育要領）がある。要領には日本と同じように５つの領域が設定されている。また保育時間は１日８時間（週40時間）が標準であるが、１日５時間（週25時間）から１日10時間（50時間）までが選べるようになっている。

2-3　初等教育

小学校（scuola primaria）の年限は５年間であり、原則６歳から11歳の子どもが通っているが、早生まれの場合は１学年後の学年に入ることもできる。授業時間は週24/27/30/40時間で、入学手続時に選択する仕組みになっているというが、同じ学校内でそれらが並行するということはないと聞いている。またヨーロッパの多くの国でみられるのだが、小学校においても落第の制度がある。以前は中学校への進級テストがあり、合格しないと進級できなかったが、現在は進級テストは廃止されている。

１クラスの児童数は25名くらいまでとなっており、低学年は２クラスに３人の教員が配置されている。また日本と大きく違うのは、進級ごとのクラス替えがなく、担任も原則５年間同じ先生が務めるという点である。

例えば週の時間数が27時間であった場合の１週間あたりの授業時間例を表したのが表１である。ローマがカトリックの総本山であるという状況もあってか、キリスト教の時間が設定されている。

表１　イタリアの小学校における授業時間数

	イタリア語	英語	歴史	地理	数学	科学	情報	音楽	美術	体育	キリスト教	合計
１年	7/8	1	2+1	2+1	5/6	2	1	1	1	1	2	27
２年	6/7	2	2+1	2+1	5/6	2	1	1	1	1	2	27
３年	6/7	3	2+1	2+1	5/6	2	1	1	1	1	2	27
４年	6/7	3	2+1	2+1	5/6	2	1	1	1	1	2	27
５年	6/7	3	2+1	2+1	5/6	2	1	1	1	1	2	27

2-4　中等教育

中等教育は前期と後期に分かれる。日本の中学校に相当するのが第１中等教育学校（scuola secondaria di primo grado）である（以下中学校とする）。かつては scuola media とも呼ばれていた。年限は小学校修了後、11歳〜14歳の３年間であり、義務教育となっている。中学校の卒業時には修了試験がある。

日本の高校に相当するのが第２中等教育学校（scuola secondaria di secondo grado）である（以下高校とする）。こちらは scuola superiore とも呼ばれる。年限は学校の種類によって４〜５年制となっている。そのうち、最初の２年（16歳まで）は義務教育となっている。専門によって文系／理系／芸術／技術など多様な学校がある。

この高校終了時には maturita という卒業試験が行われる。こうした中等教育修了時に資格試験が行われるのは、フランスのバカロレアやドイツのアビトゥーアなど、ヨーロッパでは一般的である。卒業試験は高校卒業前の６月に実施され、１日４時間のテストが１週間ほど続く。科目としては１部がイタリア語の論文、２部が専門科目となっており、この２つは全国共通の問題が出題される。３部は学校によって異なる試験が行われる。最後の４部は口述試験となっている。こうした試験で口述試験が重視されるのもヨーロッパに共通している点である。

2-5　高等教育

高等教育機関の中心となるのは大学（universita）である。大学以外に高等技術教育機関、芸術・音楽高等教育機関などがある。大学に入るには、先述した中等教育の卒業国家試験（maturita）に合格する必要がある。大学の卒業年限は基本的には３年制となっているが、かつては４年制だった。しかし、こちらも大陸ヨーロッパに共通の傾向だが、規定年数で卒業する人は少なくなっている。

2-6　特別支援教育

最後に特別支援教育についても触れておく。イタリアは全世界に先駆けて精神病院を廃止した国として知られており、教育においてもインクルーシブ教育が進んでいる。そのため、1970年代から統合教育が進んでおり、特別支援学校は存在しない。小学校では、支援を必要とする児童が在籍する場合、学級人数が25人から20人に減らされ、教員も加配がある。幼稚園や中学校以上の学校でも加配等の措置が取られる。1980年代から「支援教師」制度が取られており、専門的な知識を持ち、個別支援計画を作成できる体制となっている（大内・藤原 2015）。

３．データで見る日伊の教育

次に OECD の Education at a Glance からいくつかのデータを使って、イタリアと日本の教育について比較していく。

3-1　小中学校の授業時間数

表２はイタリアと日本の小中学校における授業時間数を比較したものである。参考のために OECD 諸国の平均値も記載している。

表２　小中学校の授業時間数（カッコ内は年数）

	小学校授業時間		中学校授業時間	
	年あたり	合　　計	年あたり	合　　計
イタリア	891	4,455（5）	990	2,970（3）
OECD 平均	799	4,620（6）	913	2,913（3）
日本	763	4,576（6）	893	2,680（3）

出典：OECD　Education at a Glance 2019

小学校、中学校ともにイタリアは日本よりも授業時間数が多いことが分かる。OECD 平均値は両国の中間にあたる。小学校の終了年限がイタリアは５年で日本が６年と日本が１年長いため、合計時間では日本の方が長くなる。小学校と中学校を合計するとイタリアが7,425時間、日本が7,256時間となり、ほとんど変わらない時間数となる。

3-2　教員数と児童数の関係

次に教育環境を表す指標の１つである１クラスあたりの人数と、教員１人あたりの児童生徒数を表しているのが表３である。イタリアは OECD 平均よりも１クラスの人数がやや少なくなっているの対して、日本は小中学校ともにイタリアのほぼ1.5倍のクラスサイズとなっていることが分かる。ちなみにイタリアでは小学校に組替えは無く、原則５年間おなじクラス編成が続く。担任教師も原則そのまま持ち上がるということで、毎年組替えが行われ、担任も変わる日本とはかなり様相が異なっている。

教員１人当たり児童生徒数についてもクラスサイズ同様イタリアが最も少なく、日本が多く OECD 平均値がその間にある、という関係になっている。ただし、中学校については教科担任制を取る日本では教員数が増えるため、OECD と同じ水準になっている。いずれにせよ、イタリアが人員配置的に見れば日本より恵まれた環境にあることは間違いない。

表３　小中学校の１クラスの人数および教員１人当たり児童生徒数

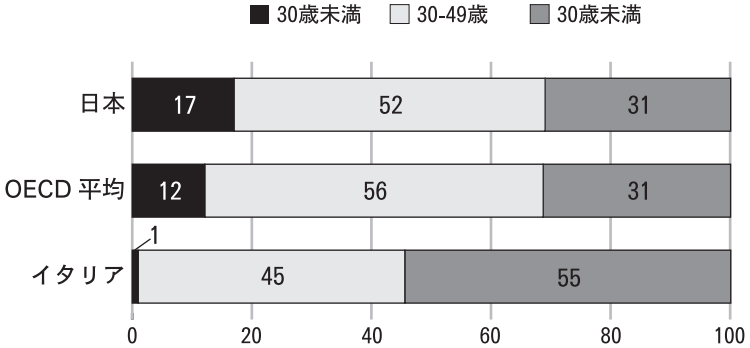
	１クラスの人数		教員一人当たり児童生徒数	
	小学校	中学校	小学校	中学校
イタリア	19	21	11	11
OECD 平均	21	23	15	13
日本	27	32	17	13

出典：OECD　Education at a Glance 2019

3-3　教員の構成

次に教員の構成についてみていく。まず小学校教員について年齢別の構成比を見たものが図１である。イタリアでは30歳未満という比較的若年の教員が全体の１％と極端に少なく、逆に50歳以上が55％と日本や OECD と比べても圧倒的に多いことが分かる。日本もかつて「団塊の世代」の大量採用が影響して年齢構成がいびつになっていると指摘されてきたが、国際的に

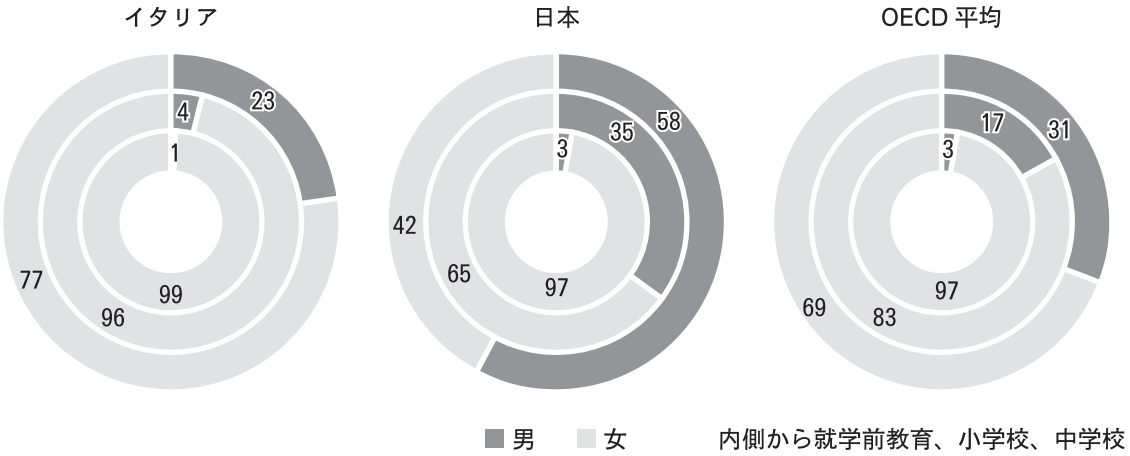
みれば若年教員割合が比較的高いということが分かる。50歳以上の割合は31％と OECD 平均と同じになっていることから、教員採用数が抑えられてきた時代を経て近年の新規採用数の増加によって、いわゆる「中堅層」が相対的に少なくなっていることが分かる。



出典：OECD　Education at a Glance 2019

図１　小学校教員の年齢構成

次に教員の男女比についてみると、こちらも国によって構成が大きく異なることが分かる。イタリアでは段階を問わず女性比率が非常に高い。就学前教育では男性は１％であるが、小学校においてもその比率は４％に過ぎない。中学校では比率が高くなるが、それでも23％である。対して日本では就学前教育こそ男性比率３％とイタリアと極端に違うとは言えないが、小学校では35％を男性教員が占め、イタリアとは大きく異なる。中学校に至っては58％と過半数が男性教員となることが分かる。OECD 平均を見ると就学全教育については日本と同じく女性が97％を占めるが、小学校と中学校では日伊のほぼ中間の値となっていることが分かる。すなわち平均と比べると、イタリアは「女性教員が多い国」、日本は「男性教員が多い国」であることが分かる。



出典：OECD　Education at a Glance 2019

図２　教員の男女比率

3-4　PISA 調査結果

データによる日伊比較の最後は教育成果の指標として OECD の国際学力調査である PISA2018 の結果を見ておこう。

表 4　PISA2018　3 分野の点数と順位

	数学的リテラシー		読　解　力		科学的リテラシー	
	順　位	得　点	順　位	得　点	順　位	得　点
イタリア	31	487	32	487	40	468
OECD 平均		489		487		489
日本	6	527	15	504	5	529

出典：国立教育研究所（2019）

イタリアの順位は数学的リテラシーが31位、読解力が32位、科学的リテラシーが40位となっている。点数では数学的リテラシーと読解力がほぼ OECD 平均と同様で、科学的リテラシーは OECD 平均よりやや劣っていることが分かる。日本はどの分野も比較的順位が高く、点数についても OECD 平均を大きく上回っている。こうした傾向は近年ずっと続いており、平均的なパフォーマンスという点では日本の方が高い結果を残し続けていることが分かる。

以上みてきたように、イタリアの教育は日本と比べると学校での授業時間数が長く、教員数からみた教育環境も恵まれており、相対的にベテラン教師も多い。しかし少なくとも PISA 型学力については日本の方が高いパフォーマンスを残していることが明らかとなった。

4．イタリアにおける教員養成

最後にイタリアの教員養成制度がどのようになっているのかを、ミラノにある私立サクロ・クオーレ・カトリック大学教育学部のカリキュラムから見ていく。

4-1　サクロ・クオーレ・カトリック大学

ミラノにあるサクロ・クオーレ・カトリック大学（Università Cattolica del Sacro Cuore 以下 UCSC）は、その名の通りカトリック系の私立大学である。イタリアは他のヨーロッパ諸国同様国公立大学が多い国であるため、私立大学の割合は小さくなっている。その中でも UCSC はヨーロッパ最大規模の私立大学で、世界最大のカトリック系大学である。ただし設立は1921年ということで、ボローニャ大学を嚆矢とする中世以来の歴史ある大学が多いイタリアの中では比較的新しい部類に入る。メインキャンパスはミラノにあるが、その他評価の高い医学部があるローマなど合計 6 つの都市にキャンパスを持つ。UCSC は総合大学として12の学部を持っている。ミラノキャンパスにはそのうち 8 つの学部が集まっている。また教育学部はミラノ以外にもブレシアとピアチェンツァのキャンパスにも設置されている。

4-2　教育学部初等教育学科のカリキュラム

教育学部にある初等教育学科では、幼稚園と小学校の教員免許を取得することが可能である。

そこではどのようなカリキュラムが設定されているのかを見ていく。

最初に見た通り、イタリアでは大学の終了年限は3年が一般的であるが、初等教育学科では標準修了年限を5年としている。すなわちフィンランドなどと同様、大学院修士レベルの教育が行われていると考えることができる。

カリキュラムは大きく2つのカテゴリーに分けられる。1つは「何を教えるのか」ということで、各教科に関する内容である。もう1つが「どのように教えるのか」ということで、教授法や背景となる教育学・心理学などの理論に関する内容となっている。

具体的なカリキュラムは以下の通りとなっている。1年次で61単位、2年次で59単位、3年次で67単位、4年次で62単位、5年次で51単位、5年間合計で実習含めて38科目300単位の修得が必要である。科目の内容は日本でいうと一般教養に相当するような科目から専門の基礎となる理論、さらに教科や教授法の専門科目まで多岐にわたっている。カトリック系の大学ということで、これ以外に各学年で神学に関する科目を履修しなければならない。

表5の中で科目名に＊がついている科目は、座学のほかにワークショップ（laboratorio）が行われる。ワークショップはそれぞれ4時間の研究会が5回行われる。

表5　UCSC　初等教育学科のカリキュラム

	科　目　名	単位数
1年次	一般教育学	8
	発達心理学	8
	学校と教育機関の歴史	8
	地理*	9
	現代史	8
	教育研究論*	7
	運動教授法*	9
	英語	4
2年次	一般教授学*	12
	古代社会	8
	教育社会学	8
	イタリア文学*	13
	算数*	11
	英語	2
	実習1	5
3年次	特別教育学*	10
	インターカルチュラル教育学*	9
	幼児文学*	9
	現代美術の歴史*	9
	イタリア語*	13
	英語	2
	英語　B2級試験	2

	科　目　名	単位数
3年次	以下より1科目選択	8
	哲学的思考	
	教育システムと教職について	
	家庭における社会的心理学	
	英語	
	実習2	5
4年次	評価方法論	6
	幾何学初歩*	11
	ICT教育*	15
	地学と栄養学*	13
	教育心理学*	9
	英語	1
	実習3	7
5年次	実験物理*	9
	実験科学*	4
	音楽的コミュニケーションの基礎*	9
	臨床心理学	8
	学校法	4
	英語	1
	卒論	9
	実習4	7

出典：UCSC教育学部概要パンフレット

4-3　教育実習

教員免許を取得する学生に対して非常に長時間の実習を課していることもイタリアの特徴である。実習は2年次から始まり、合計24単位、時間にして600時間となっている。ただしこの600時間が全て小学校等現場での実習というわけではなく、「間接実習」240時間と「直接実習」360時間に分けられる。このうち間接実習は日本でいうところの「事前指導」や「事後指導」に相当するもので、記録の取り方を学んだり、実習中に起きるであろう出来事に対してシミュレーションを行ったりする。実際に現場で観察をしたり、授業をしたりするのが「直接実習」となる。

UCSCではこうした授業に対してブラックボードを利用したLMSが活用されており、eポートフォリオが導入されているという。そこでは教師としての能力、教育者としての能力、自身を高める能力について、対話的にページを作成することができるようになっている。

また年に2回、合計8回の「学外授業」が行われる。これは美術館や博物館、もしくは特殊な教育法を実践している学校園で行われるもので、自身の実習に活かすことが目的とされる。

直接実習のうち、2、3年次の実習1・2ではそれぞれ60時間が行われる。内訳は観察に10時間、面談や会議に参加するなどの企画に10時間、実践に40時間となっている。4、5年次に行われる実習3・4では100時間が要求されるが、2つのパターンから選択することができる。1つ目のパターンは実習1・2と同様で、観察に20時間、企画に10時間、実践に70時間と時間配分が若干異なっている。2つ目のパターンは100時間を70時間と30時間に分けて実施するもので、実験校なども対象にするパターンとなっている。その場合、最初の学校では観察、企画、実践がそれぞれ10、10、50時間、さらに10、4、16時間の実習を別種の学校で行うことになる。

卒業と免許が認定されるには、論文と共に、実習最終報告書を作成し、口述試験を経て合格する必要がある。実習最終報告書の作成にはeポートフォリオに残してきた自身の「学びの軌跡」が参考資料として用いられることになる。

4-4　資質フレームワーク

eポートフォリオなどの作成においては、「資質フレームワーク」と呼ばれる教育目標、到達目標が設定されている。これは1999年にジュネーブ大学のフィリップ・ペレノー（Philippe Perrenoud）が発表した「教育に必要な新しい10の能力（Dix nouvelles compétences pour enseigner. Invitation au voyage)」をもとに作成されており、自身の活動などを振り返り、自己評価を行う際の指針となるものである。

表６　学生が卒業時に必ず身につけていなければいけない能力

分　　野	能　　力
教師としての能力	新しいテクノロジーを駆使しながら学びの場を設け、生徒の学びを促す
	学びの発展をコントロールする
	インクルシブを促し、推進する
	生徒の学びを観察し、的確に評価する
	活動に生徒を巻き込み、学びを実感させる
学校園での生活に関する能力	グループで活動する
	学校園の運営や改革に積極的に参加する
	保護者との連携
自身の資質に関する能力	新しいテクノロジーを効果的に活用する
	教師としての義務や道徳と向き合う
	研修を継続的に行う
	過去を見直し、未来の目標を立てる

出典：Rivoltella（2019）

５．まとめ

本稿ではイタリアの教育制度について概観した上で、いくつかの指標についてOECDのデータを用いて日本との比較を行った。比較的少人数な教育が行われている点やインクルーシブ教育を行っている点、義務教育の授業時間数においても選択の余地があるなど柔軟性があることが明らかとなった。またデータからは初等中等教育において教員の年齢や性別の構成に日本と大きな差があることが分かった。

UCSCの教員養成カリキュラムからは科目構成に加えて実習の時間数が日本と大きく異なることが分かる。実習以外にもワークショップなど対話的な授業が多く行われている点や、ｅポートフォリオを用いた構造的な振り返りを用いて資質向上を図っていることが特徴である。

日本の小学校や幼稚園における教育実習については、法令上時間数に関する規定はないが、実習期間は４週間なので労働時間１日８時間、週５日労働とすると160時間ということになる。これに実習指導１単位分が加算されるので、学修時間としては45時間である。これをイタリア流に「間接実習」と解釈すると合計で205時間の実習時間ということになる。そうするとイタリアでは日本のざっと３倍の実習が行われていることになる。

最後の10の能力に基づいたｅポートフォリオや実習最終報告書の作成は、日本でも教職実践演習が義務化された際、「履修カルテ」という形で毎年の振り返りが導入されたことと共通する点がある。しかし、履修カルテの運用は各大学によって大きく異なるため、その効果も評価は定まっていない。

今回は教育制度や教員養成カリキュラムについて、概観を明らかにするにとどまっており、両国の差異が生まれる要因や歴史的経緯、教育現場や教職希望学生の具体的な学びなどについては今後の課題としたい。

謝辞

本稿の作成にあたって、本学が協定を結んでいるサクロ・クオーレ・カトリック大学教育学部初等教育学科長ピエル・チェザーレ・リボルテッラ教授ならびに初等教育学科学生が作成したプレゼンテーション用スライドを参考にした。翻訳は平吹和佳子さんが行ったものに基づいている。またミラノの私立マリア・コンソラトリーチェ幼小一貫校の幼稚園園長、イザベッラ・ヴァッリ先生からも多くのアドバイスを頂いた。

引用・参考文献

大内進・藤原紀子（2015）「イタリアにおけるインクルーシブ教育に対応した教員養成及び通常の学校の教員の役割」『国立特別支援教育総合研究所研究紀要』第42巻 pp.85-96

川村光（2015）「改革期にあるイタリアの小・中学校教員養成」『関西国際大学教育総合研究叢書』8 号 pp.1-13

紅林伸幸・川村光（2014）「グローバリゼーションと高度化の中の教員養成改革：イタリアの取り組み」『パイデイア：滋賀大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』22巻 pp.71-77

国立教育政策研究所（2014）『教員環境の国際比較－OECD 国際教員指導環境調査（TALIS）2013 年調査結果報告書』明石書店

国立教育政策研究所（2019）『OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）2018 年調査国際結果の要約』

多田孝志（2012）『イタリアの小学生』学研教育出版

外務省：諸外国・地域の学校状況＝イタリア（2019年12月11日確認）
https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/05europe/infoC50700.html

イタリアの教育（イタリア語版 Wikipedia）（2019年12月11日確認）
https://it.wikipedia.org/wiki/Istruzione_in_Italia

BROCHURE LAUREE TRIENNALI E A CICLO UNICO DELLA FACOLTA DI SCIENZE DELLA FORMAZIONE-A.A. 2019/20（サクロ・クオーレ・カトリック大学教育学部概要）（2019年12月10日確認）
https://offertaformativa.unicatt.it/cdl-LT_Scienze_della_formazione_MI-BS-PC_(web)_2019.pdf

OECD：Education at a Glance（2019年12月11日確認）
https://www.oecd.org/education/education-at-a-glance/

Rivoltella, Pier Cesare (2019) *Le competenze organizzative, comunicative e tecnologiche del tutor accogliente*（2019年12月11日確認）
https://www.unicatt.it/cattolicaperlascuola/scuola-Le_competenze_del_tutor_accogliente_-_17.01.19.pdf